

“Small Talk”が児童の外国語活動に対する 様々な意欲に及ぼす影響について

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 金丸由梨

1. 研究背景

小学校では、3・4年生に外国語活動、5・6年生に外国語が教科として導入されている。新学習指導要領に基づく外国語科の指導においては、4技能のうち、「話すこと」が「やり取り」と「発表」にわかれ、音声による言語材料の定着や自然な会話への慣れ親しみに重点が置かれている（文部科学省、2018）。

その中でも「やり取り」の指導において、“Small Talk”という活動が注目されている。簡単な語句や文を用いて即興で話すことを求められている中学校英語（文部科学省、2018）では、即興力を高めるための素地として、つまり中学校における英語運用力育成に資する指導方法として“Small Talk”が重視される。

一方で、小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（文部科学省、2017）では、“Small Talk”という活動の中で、よりやり取りの指導が行いやすく、同時に児童のコミュニケーションへの態度や意欲を高められるとされている。白畑ら（2019）は、“Small Talk”が英語モードへの切り替えを促し、英語を理解する姿勢や英語の能力をも育てることができるとしている。また、内山ら（2019）は、英語を聞き取る形式の“Small Talk”を通して動機づけを図る研究において、学級担任にも指導でき、英語の成功体験を積ませることができるとしているが、英語に自信がない、英語が難しいと感じる児童にとっては動機上の変容が見られなかったと述べている。

これらのことから、“Small Talk”は英語を理解する姿勢や成功体験につながる活動になるものの、児童の持つ能力を把握し、英語に対してマイナスなイメージを持っている児童に考慮した活動の工夫が必要であると言える。

そこで、小学校での外国語活動・外国語の導入によって英語嫌いが増えないかと懸念される中、“Small Talk”をどのように工夫することで、外国語に対する様々な意欲に変化を及ぼすことができるのかについて実践研究により明らかにする必要があると考えた。

2. 小学校における“Small Talk”

小学校での“Small Talk”は、5・6年生で設定される活動であり、「2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること（文部科学省、2017）」とされている。扱う学年に関して、川村（2020）は、3・4年生でも指導者の話を聞くことを中心とした活動から導入すれば十分おこなえるのではないかと述べており、工夫をすれば学年にとらわれる必要はないと考えられる。“Small Talk”の目的は、表現の定着や対話の継続（文部科学省、2017）であり、誰かになりきって話したり、擬似的な対話をしたりするのではなく、指導者や児童が自分自身に関する本当の出来事や気持ちなどについてやり取りすることが大切である（川村、2020）。これらを意識するためには、児童一人ひとりが持っている、相手からの問いに対する「自分だけの答えを言いたい」や「自分のことを話したい」という他者とコミュニケーションを取る意欲を高める必要がある。

また、“Small Talk”に関する意欲の種類については、様々なものが考えられる。例として、(1) 外国語の授業への意欲、(2) 英語を使いたいという意欲、(3) コミュニケーション意欲、(4) Small Talkの活動自体に対する意欲、(5) “Small Talk”で扱うテーマや内容に対する

意欲などが挙げられる。本研究では、様々な意欲の中の (1) 外国語の授業への意欲と (2) 英語を使いたいという意欲の 2 点に重点を置いて検証する。

3. 研究方法

(1) 対象者 山梨県公立小学校

3 年生 (30 名), 4 年生 (31 名)

扱う学年に関して前述した通り、川村 (2020) は 3,4 年生でも指導者の話を聞くことを中心とした活動から導入すれば十分おこなえるのではないかと述べており、工夫をすれば学年にとらわれる必要はないと考えられる。本研究では、5,6 年生に導入されるべき”Small Talk”をその準備段階として簡易化した形態で取り入れ、本格的に”Small Talk”をおこなう前に意欲を持つきっかけづくりをすべきであると考え、対象を 3,4 年生に設定した。

(2) “Small Talk”の実践期間と調査期間

3 年生 : 令和 2 年 11 月 11 日, 18 日, 25 日, 12 月 9 日 (計 4 回)

4 年生 : 令和 2 年 10 月 21 日, 28 日, 11 月 4 日, 11 日 (計 4 回)

(3) 調査内容

① “Small Talk”の授業実践

“Small Talk”の流れを作成 (図 1) し、ALT とともに各授業の冒頭でおこなった。

| 分 | 学習活動・内容 | 指導上の留意点 | 配布物・教材 |
|-----------|---|---|---------------------------|
| 導入 5分 | 1. あいさつ ○いつものやりとりをする Good afternoon, everyone. How are you? What's the date today? など | ●ALT の先生にいつも通り進めてもらう。 | |
| 展開 15分 | 2. Small Talk の説明 3. Small Talk ・ゲーム 「好きなキャラクター (character)」 “What character do you like?” 先生同士のやりとりを見る・聞く A: Hello. B: Hello. A: What character do you like? B: I like □□. A: Good. B: What character do you like? A: I like △△. B: Nice. A: Bye. B: Bye. ・言の確認をする (Repeat) ALT の先生に試いてリピートする ・自分の答えを考えた・書く (30秒 - 1分) ・【ペア 1】とやりとりをする (1分) ・わからなかったこと、困ったことの確認をする (3分) ・【ペア 2】とやりとりをする (1分) ・ふりかえりシートを書く (3分) | ●Small Talk がどのようなものかを説明する。 ●ゲームはイラストを貼って何について行いかず進ませる。 ●どのような聞き方をしているか、どのような答え方をしているかに注目して聞いてもらう。 ●先生同士のやりとりから発音は正しい方を確認する。 ●質問の仕方、答え方を繰り返し練習する。 ●ワークシートの書き方の確認をする。 ●席を立って行う。 ワークシートは机においておく。 ●紙重のつまずき、書えなかったことを確認して 2 回目をを行う。 ●記入後、ワークシートとふりかえりシートを回収する。 | 絵カード ワークシート 振り返りシート |

※アンケートは授業終了後、時間おつづけていたいで回答してもらう。

図 1 授業の流れ

② 英語学習への意欲や動機に関する質問紙調査 (事前・事後アンケート)

児童は、4 件法により作成したアンケートを “Small Talk” 授業の実施前後の計 2 回おこなった (図 2)。今回は、児童の “Small Talk” に対する認知度が低いことを考慮して、調査について 1 回目の授業後を事前、4 回目の授業後を事後とした。事前と事後の変化を見取るため、どちらも同様のものを用いた。なお、アンケート調査の選択肢は、担任の先生と相談し、質問に合った言葉で表記した。集計は、各問いに対する選択肢の最高評価を 4、最低評価を 1 と数値化し、授業の最初の回と最後の回の数値差を、t 検定を用いて分析した。また、児童の感想を確認するため、自由記述欄を設け、テキストマイニングを用いて分析した。

★外国語の授業について、あてはまるものに○をつけてください。

| | | |
|---|------------------|------------------------------------|
| 1 | 外国語のじぶりは好きだ | とても好き まあまあ好き あまり好きではない 好きじゃない |
| 2 | 外国語のじぶりは楽しい | とても楽しい まあまあ楽しい あまり楽しくない つまらない |
| 3 | 外国語のじぶりはむずかしい | かんたん あまりむずかしくない まあまあむずかしい とてもむずかしい |
| 4 | 英語をもっと聴かせるようにしたい | とてもやりたい まあまあやりたい あまりやりたい ならない |

★スモールトークについて、あてはまるものに○をつけてください。

| | | |
|---|--------------------------|---|
| 1 | スモールトークは好きだ | とても好き まあまあ好き あまり好きではない 好きじゃない |
| 2 | スモールトークは楽しい | とても楽しい まあまあ楽しい あまり楽しくない つまらない |
| 3 | スモールトークはむずかしい | とてもむずかしい まあまあむずかしい あまりむずかしくない かんたん |
| 4 | スモールトークは毎学年 | 毎年 あまりいいではない まあまあいい とてもいい |
| 5 | スモールトークで英語の言い方を覚えることができた | とてもできた まあまあできた あまりできなかった できなかった |
| 6 | スモールトークで英語のことを知る事ができた | とてもできた まあまあできた あまりできなかった できなかった |
| 7 | スモールトークでもっと英語と触れたいと思った | とても思う まあまあ思う あまり思わない 思わない |
| 8 | スモールトークを通して外国語の勉強が楽しくなった | とても楽しくなった まあまあ楽しくなった あまり楽しくならなかった 楽しくならなかった |

★スモールトークについて感想や思ったこと、考えたことを自由に書いてください。

図 2 事前・事後アンケート

③ 授業ふりかえりシート

毎授業の “Small Talk” 活動終了後に本時の振り返りとしておこなった (図 3)。事前・事後アンケートと同様に、4 件法で作成し、選択肢は質問に合った言葉で表記した。それぞれ変化を見取るために、4 回すべて同じものを用いた。なお、集計もアンケートと同様に、回答の最高評価を 4、最低評価を 1 と数値化し、4 回の授業の 1 回目と 4 回目の数値差を、t 検定を用いて分析した。また、児童の感想を確認するため、自由記述欄を設け、テキストマイニン

グを用いて分析した。

| スモールトーク ふりかえりシート | | 名前() |
|-------------------------------------|------------------------------|---|
| 1 | スモールトークは好きですか | とても好き まあまあ好き あまり好きではない 好きではない |
| 2 | スモールトークは上手にできましたか | とても上手にできた まあまあ上手にできた あまり上手にできなかった 上手にできなかった |
| 3 | スモールトークで友達に上手に質問をすることができましたか | とても上手にできた まあまあ上手にできた あまり上手にできなかった 上手にできなかった |
| 4 | スモールトークを次の時間もやりたいですか | とてもやりたい まあまあやりたい あまりやりたくない やりたくない |
| 今日の感想 がんばったこと、むずかしかったことなど自由に書いてください | | |

図 3 ふりかえりシート

④ ワークシート

“Small Talk”の活動において、自分自身の答えを言えるように補助教材としてワークシート(図4)を作成した。自分自身の答えに加えて、やり取りをした後、友達が何と言っていたのか聞き取ったものを記入してもらった。友達的答案を書く理由は、やり取りの成立に対して情報の認知が必要であるとともに、やり取りにおける達成感が得られるようにするためである。なお、本研究の分析では、このワークシートは用いていない。

| スモールトーク ワークシート | | | | 名前() |
|--------------------|-----|-----|-----|-------|
| 今日のテーマ | | | | |
| 私たちのすきな()をきいてみよう! | | | | |
| | あなた | ペア1 | ペア2 | |
| 名前 | | | | |
| 答え | | | | |

図 4 ワークシート

4. 本研究の“Small Talk”について

(1) 時間と形態

“Small Talk”は、帯活動として扱い、授業冒頭でおこなった。活動時間は、10分程度(川村, 2020)とされているが、ふりかえりシートやワークシートを記入する時間を考慮して20分程度でおこなった。

(2) 会話の形態

会話の形態については、対象学年が3,4年生

という点を考慮し、以下に示したものに限定した。なお、毎回同じ形態で用いた。

質問：“What ○○do you like?”

答え：“I like □□.”

また、答えるときには答えの名詞を日本語でも言っても良いとした。例として、“What animal do you like?”に対して“I like いぬ。”と答えるといったケースである。この点に関しては、対象学年が先行研究より低いこと、研究対象である児童の能力レベルを考慮するためであると同時に、英語を覚えたり既成の答えを言わせたりするのではなく、自分自身の答えをやり取りでそのまま言えるようにしてほしいという点で担任教師とも検討した結果、このような工夫をおこなうべきだと判断した。なお、児童が質問と答えの言い方を頭に入れるように、リピートする回数や児童全員で声に出す機会を多く設けた上でやり取りに入った。

(3) 話すテーマ

テーマについては、毎回異なるものを設定した。“What ○○ do you like?”の○○の箇所に入るもので、自分の本当の答えが言えるように、答えとなり得るものができる限り多くなるテーマを担任教師と相談の上で選んだ。

テーマ：i) キャラクター (character)
ii) 教科 (subject)
iii) 動物 (animal)
iv) 食べ物 (food)

(4) “Small Talk”の手順

“Small Talk”の手順と指導においては、川村(2020)が示しているものを用いた。

① 話題提供

最初に導入として、本時のやり取りをデモンストレーションすることを含めた教師による話題提供をおこなう。話題提供の中で、その日に取り組む内容や英語の型を先に与えてしまうことは“Small Talk”の主旨に反してしまうため、避ける必要がある。本研究では、ALTとともにデモンストレーションをおこなった上で、本時のテーマをイラストにして黒板に貼り、本時は何のテーマについて話すのかに

ついて予想する機会を設けた。

② やり取り 1 回目

1 回目のやり取りを児童同士のペアでおこなう。本研究では、1 回の授業で同じテーマについて 2 回やり取りをおこなうため、ペア 1、ペア 2 という固定のものをあらかじめ決めて児童に伝えておいた。ペアに関しては、児童 2 人の能力や座席を考慮して担任教師と決定した。なお、児童数が奇数の場合は担任教師や ALT が入り、必ずペアになるようにした。やり取りの 1 回目では、ペア 1 とやり取りをおこなった。

③ 中間交流

中間交流では、児童が言いたくても言えなかったこと、困ったことなどの課題確認をおこなう。ここでは、課題の確認、既習事項の想起、言い換え、翻訳といった 4 つのポイントを用いながら課題解決のための支援をおこなうことが求められている。本研究では、日本語で回答しているが、この時間が既習のものやイラストで出したものを英語で確認する時間となった。

④ やり取り 2 回目

最後に 2 回目のやり取りを再び児童同士でおこなう。やり取り 2 回目は、1 回目とペアを変え、ペア 2 とやり取りをおこなった。今回はスムーズなやり取りの完成を目指した。

以上の過程が川村 (2020) で示されている。本研究ではこれらの後に、意見交流の時間を設け、何人かの児童に自分の答えを発表してもらう機会を設けた。

5. 結果及び考察

(1) 外国語の授業への意欲

外国語の授業への意欲については、事前・事後アンケートにおける外国語についての問 1 「外国語の授業は好きだ」、問 2 「外国語の授業は楽しい」、「Small Talk」についての問 8 「Small Talk をしたら外国語の授業が楽しくなった」という 3 点に注目し、事前と事後の結果を比較した。

まず、3 年生において、3 つの問いのすべて

で平均点が上がった。t 検定による前後比較では、外国語についての問 1 (図 5) では有意差は見られず、問 2 (図 6) では有意傾向が見られた。Small Talk についての問 8 (図 7) では、有意差は見られなかった。有意差が見られなかった原因としては、事前アンケートの時点から高評価をつけた児童が多かったため、「Small Talk」実施前から外国語の授業に対する意欲が高かったことが考えられる。その中でも、わずかながらも低評価をつけていた児童が減っていることがわかる (図 5,6,7)。

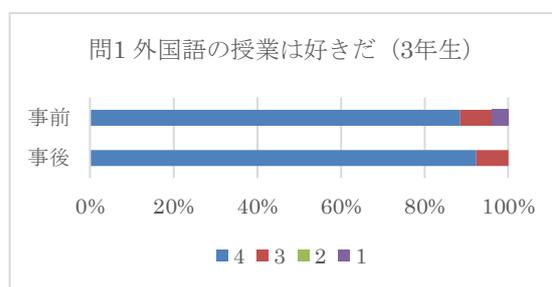


図 5 問 1 児童の回答割合 (3 年生)

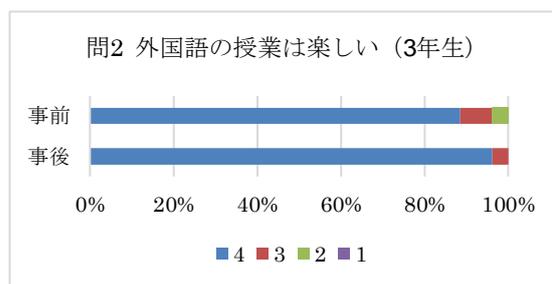


図 6 問 2 児童の回答割合 (3 年生)

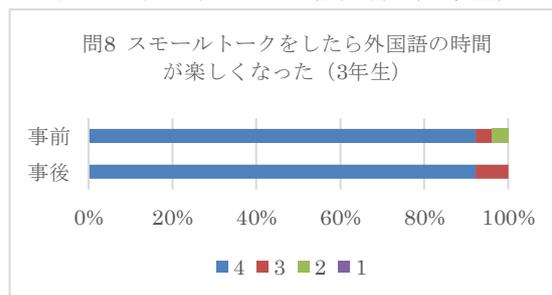


図 7 問 8 児童の回答割合 (3 年生)

次に、4 年生において、3 つの問いのすべてで平均点が上がった。t 検定による前後比較では、外国語についての問 1 (図 8) と問 2 (図 9)、「Small Talk」についての問 8 (図 10) の 3 つすべてで 5% 水準にて有意差が見られた。どの問いに対しても、最高評価をつけた児童が約 1~2 割増加している (図 8,9,10)。

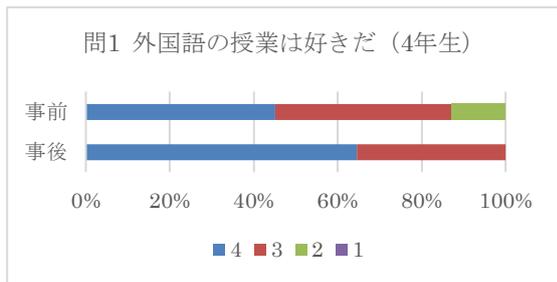


図 8 問 1 児童の回答割合 (4 年生)

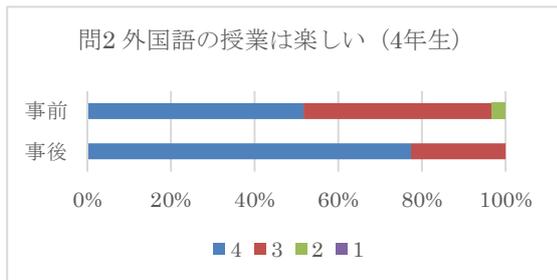


図 9 問 2 児童の回答割合 (4 年生)

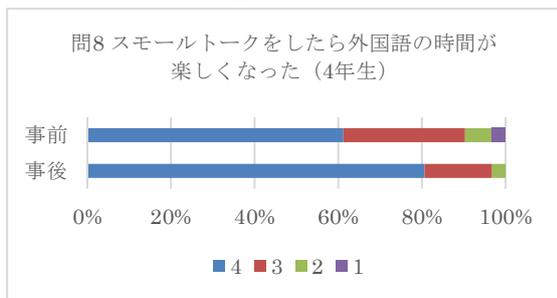


図 10 問 8 児童の回答割合 (4 年生)

以上のことから、4年生の結果より、“Small Talk”の実施によって外国語の授業への意欲が向上すること、3年生の結果より、外国語の授業への意欲の保持ができると考える。

(2) 英語を使いたいという意欲

英語を使いたいという意欲については、事前・事後アンケートにおける外国語についての問4「英語をもっと話せるようになりたい」、 “Small Talk” についての問7「スモールトークでもっと友達と話したいと思った」という2点に注目し、事前と事後の結果を比較した。

まず、3年生において、問4は平均点に変化はなく、問7では平均点が上がった。t検定による前後比較では、どちらも有意差が見られなかった(図11,12)。有意差が見られなかった原因として、事前アンケートの時点で約9割が最高評価をつけており、もともとの意欲が高いことから変化が見られなかったと予想さ

れる。また、平均点や割合に大きな変化がないことから、英語をもっと話せるようになりたいという点に関して一定の割合で否定的な児童が存在するのではないかと推測される。

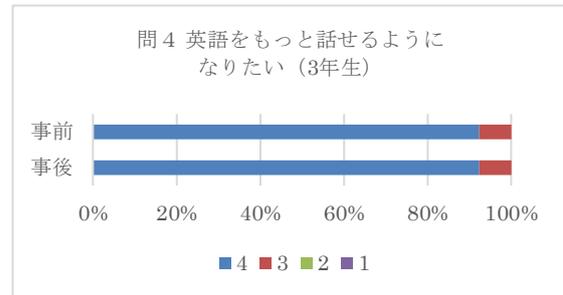


図 11 問 4 児童の回答割合 (3 年生)

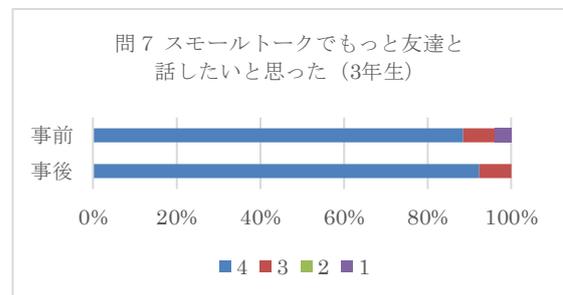


図 12 問 7 児童の回答割合 (3 年生)

次に、4年生において、2つの問いのどちらも平均点が上がった。t検定による前後比較では、外国語についての問4、“Small Talk” についての問7のどちらも有意傾向が見られた(図13,14)。問4に関しては、児童全員が肯定的な回答をしており、英語をもっと話せるようになりたいと考えていることがわかる(図13)。その中で、問7の“Small Talk”でもっと話したいと思うという問いには否定的な回答の児童も存在する(図14)。このことから、英語で話すことの楽しさに気づくことができた児童と“Small Talk”の活動と英語を使いたいという気持ちが結びついていない児童の存在が示唆される。

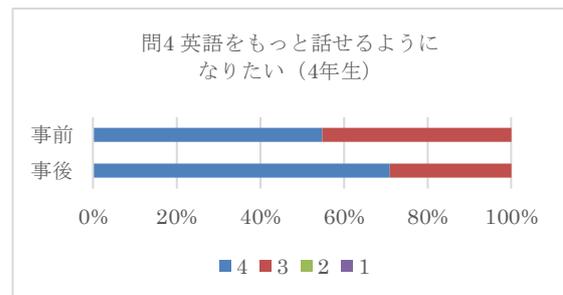


図 13 問 4 児童の回答割合 (4 年生)

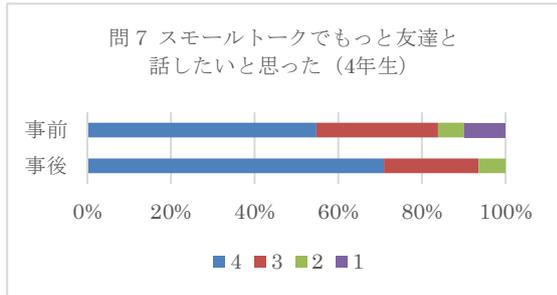


図 14 問7 児童の回答割合 (4年生)

以上のことから、英語でもっと話したいという気持ちを持っている児童は多いことが明らかになった。その気持ちが“Small Talk”によって高まる傾向は見られたが、大きな変化としては見られなかった。3,4年生が「話す楽しさ」を理解し、“Small Talk”に取り組むという点に難しさがあることが予想される。3,4年生でも「話す楽しさ」を知り、“Small Talk”にて何が得られるかを児童に伝える工夫が必要である。

(3) 事前・事後アンケートの自由記述について
自由記述については、テキストマイニングを用いて言葉の頻出度や変化を分析した。なお、図の隠されている部分には、個人名が含まれている。

まず、3年生において、事前・事後ともに共通している言葉として、「楽しい」、「好き」、「できる」、「言える」、「スモールトーク」などが挙げられる。また、「覚える」、「間違える」という言葉は事前のアンケートにのみ出現しており、「話す」、「言う」という発信に関する言葉だけでなく、「聞く」という受身の言葉の出現も見られた(図 15,16)。したがって、多くの児童が“Small Talk”に対して楽しさや好意を感じ、成功体験を得ることができたと推測される。さらに、事前アンケートでは“Small Talk”で言うことを「覚える」意識や「間違える」ことへの意識があったと予想されるが、事後アンケートではそれらの言葉が見られなかったことから、実技・意識面ともに、より本物のやり取りに近い形でできるようになったことが示唆される。加えて、3年生という対象学年でありながら、自らが「話す」ことへの意識だけでなく、友達の話す「聞く」ことへの意識

も持つことができている。聞くことへの意識は本物のやり取りを成立させるために必要なものであり、その視点を持つことができている児童がいるという点から、英語のやり取りにおける児童自身の持つ能力の高さがうかがえた。

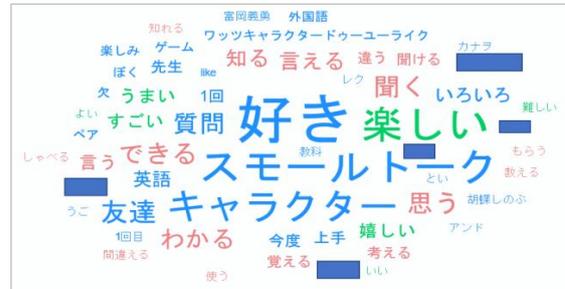


図 15 事前アンケート自由記述 (3年生)



図 16 事後アンケート自由記述 (3年生)

次に、4年生において、事前・事後ともに共通している言葉は、「楽しい」、「おもしろい」、「わかる」、「難しい」、「覚える」などが挙げられる。また、発信に関する言葉において、事前では「言う」、「言える」という言葉が多かったが、事後では「話す」、「話せる」という言葉が出現し、「続ける」という言葉の出現も見られた(図 17,18)。これらのことから、“Small Talk”に対して楽しさやおもしろさを感じる事ができたと推測される。また、最初は“Small Talk”でのやり取りを「言う」意識でおこなっていたが、「話す」意識でおこなうように変化したことは“Small Talk”での本物のやり取りに近い変化である。しかし、本研究では、難しさの軽減のために、毎回同じ形態での取り組み、日本語での回答、繰り返しの発音練習、イラストの使用などの工夫をしてきたものの、その中でも「難しい」と感じている児童の存在がある。「覚える」ことへの意識から、覚えられずにできなかったときにも「難しい」と感じ

た児童がいたことが推測される。

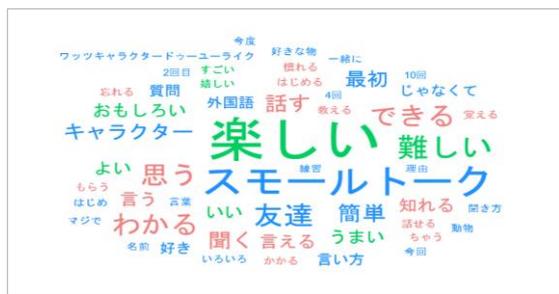


図 17 事前アンケート自由記述 (4年生)

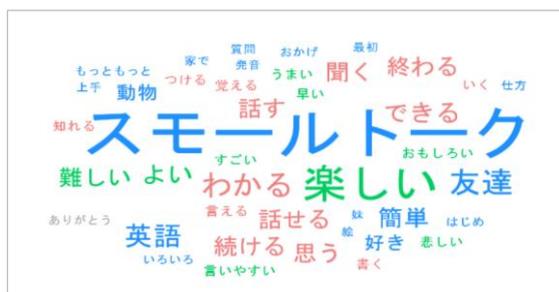


図 18 事後アンケートの自由記述 (4年生)

以上のことから、3,4年生においても“Small Talk”を楽しむことができ、やり取りにおいて必要となる「話す」、「聞く」という2点を意識して活動することができることと示唆される。その中で、「難しい」と感じた児童の存在も明らかになった。今回難しいと感じた要因としては、質問の言い方が考えられる。“What ○○ do you like?”の形は回数を重ねることで覚えられたが、“○○”の部分は毎回変わるため、覚えられなかった場合はやり取りが成立しない。特に本研究では、授業2回目のテーマに設定した“subject”という単語が難しさを生んでしまい、質問をするときにつまづいてしまう児童が多く見られた。自分の本当の答えが言えるように、答えとなり得るものができる限り多くなるテーマという点を重要視しすぎてしまったことが原因の一つである。その点については、テーマとして扱う単語の難易度も考慮する必要があることが示唆された。

(4) ふりかえりシートについて

ふりかえりシートについては、問3「スモールトークで友達に上手に質問をすることができましたか」に関して、3,4年生ともに1%水準で有意差が見られた。これは回数を重ねることで児童が成長を実感でき、「上手にできた」という達成感を得られたことが考えられる。

という達成感を得られたことが考えられる。

ふりかえりシートの自由記述においては、学年ごとに1回目と4回目の授業での記述を比較した。

3年生は、1回目には「楽しい」、「好き」という言葉が多かったが、4回目になると「できる」、「頑張る」といった言葉が多く出現するようになった。また、4回目には「アンド」や「英語」という言葉が出現している。回数を重ねるごとに、中間交流にて「複数の回答をしたい」、「英語で回答したい」という声が多くなった。そこで「アンド」の使い方や英語での言い方をALT等に教えてもらったことが自由記述に表れたと推測される。その影響で「難しい」という言葉も出現しているが、児童は少しずつステップアップしながら活動に取り組んでいたと考えられる(図19,20)。

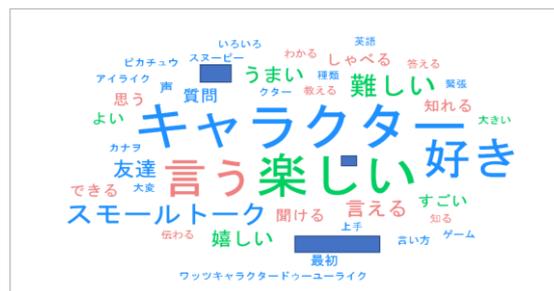


図 19 1回目ふりかえりシート (3年生)



図 20 4回目ふりかえりシート (3年生)

4年生は、授業の1回目と4目に共通で「楽しい」という言葉が出現しており、多くの児童が4回の活動を通して楽しさを感じていたことが推測される。また、1回目から4目に大きく変わった点は「難しい」という言葉が減ったこと、「わかる」という言葉の出現が増えたことが挙げられる。理由として、回数を重ねることで活動に慣れ、難しさが軽減したこと、相手の回答ややり取りを理解できるよう

